物産寳庫

甲 七

菓物類

合

A 00
5765

東京大学総合図書館

ザロンバイ　タウバイ　花戸

Prunus chinensis

産地未詳落葉果木ニシテ高サ四五尺ヨリ八九尺ニ至ル葉形常品ニ異ナラズ花ヲ開ク常ノ者ヨリ後ルヽコト凡廿日許甚色紅ニシテ弁端稍淡シ単弁又重弁ノ者并アリ単弁ノ者ハ結実一箇又重弁ノ品ハ二果ヲ連結ス時トシテハ三箇ヲ結合スル者アリ大サ常品ヨリ稍小ナレ氏形色一般ナリ木理紅色美ニシテ愛ズベシ思フニ諸器ヲ製スルニ宜シト

NO.7
100
5765
東京帝國大學圖書
B 45222
男爵田中美津男氏寄贈
先代田中芳男男旧蔵書
昭和七年
東京大学総合図書館

八年六月廿五日午前十一時署記ス

博覧会事務局

越中国射水郡ノ高岡驛ナル天神社内ニ在ル梅実ヲ中ニシテ（高岡）

形桃ノ如ク其種ナル者肉脆ニシテモ共ニ熟ス年其ノ降キリ

花ヲ生シ実ヲ結ヒテモ肬年ノ種仕着又此梅樹ヲ岡驛ノ

老人某ナル者ニ之年（花後梅ト云）実ノ桃形ナルヲ得テ蒔テニ一本ニ

已生其後天神社ノ梅ノ実ヲ結フヲ見ヲ初テ又是ヲ蒔テ

実ノ如クナルヲ得タリト云 然レ共梅ノ花ヲ不知ノ也 一種ノ者ノ

ナルヨシ也

右ハ嘗富蓋自[illegible]帰[illegible]後[illegible]帰

新村ヨリ帰リ又テ之ヲ稽路調ヲ中業

呈言

花（ハナ）譲（ユヅリ）梅（バイ）

五二五

寒梅(カンウメ)又常住梅(ジャウジュウバイ)トモ云フ
是ハ高知ノ人植ヘアリテ樹ノ
囲リ一尺モアルベシ 此他尚植ヘアリ
其実ハ大キクナラズシテ稍色付クハ
十二月頃ナリ 果実ニナルハ[illegible]
ナリ実ハ[illegible]枝デ数ニ付タヘ候
来年迄乾キ付クナラン
十七年十二月九日 聞ク写ス
[illegible] 田芳

野生桃ノ話

田中芳男記

十三年十二月十二日集會ノ節 田中房種氏曰ク
加奈川在ニハ野生ノ桃アリ 植木屋堀来リテ接
木ノ臺トナス 至極丈夫ナリト 幸ニ古来ノ野生ニ
ハ非ズシテ 種子ヨリ生セシ桃樹アリ 其実ヨリ又生
ズルニヘ 次第ニ野生ノ看ヲナスニ至リ 且果之更ニ
食スベキナキナラン 桃ハ種子ヨリ生スルモノ大低果
ノ美ナルモ恐クハ 該地モ同様ナラン 尚実地ニ付キテ
研究ニ及キナリ 又曰 甲州屏風岩ノ辺ハ梅ノ自
生アリト 是モ誤説ナレトモ 尚参考ノ為メ記ス

吉野之梅ノ下 山梨郡下并八代郡役村ノ
高野積成氏ハ庭ニ大ノ名アリ
村里ヲ為南ニ屏風岩ト申ハ西八代郡甘利村ノ内
旧高木但地内ニ於テ自然生ノ梅樹頗多アリシハ至
ニ一時到ニ至ラ村民梅樹ヲ穿採多く売却
セシ由ノ処 右ニ（小文方三蔵 丑村松山某氏ヨリ右
高年但出成し 此方〃問合セ候処） 同今梅苗等
樹株ハ何れ候ハんに有之候 委細を御
青聴くたさい
十三年六月[illegible]日九三

ツバクロモヽ
此種ハ桃類中最早ク市頭ニ上ルモノニシテ下総神天
山并流山辺ニ産ス其大サ母指ノ如ク六月上
旬既ニ熟シテ味佳ナリ
キレトキモヽ
早晩二種アリ早キモノハ「ツバクロ」ト[illegible]大低同時ニ
市上ニ列リ紅熟スルヲ以テ此名アリ晩キモノハ七月
下旬ヨリ八月上旬ニ至ル早晩共ニツバクロト出ル
所ヲ同ス
アキモヽ 青桃是

此ハ桃類中ノ最晩ク市井ニ出ヅ八月下旬ヨリ九月上旬ニ至ル大サ常ニ見ル桃ノ如シ重二十一匁
味佳美ナリ

重瓣淡紅桃花

右ハ拙宅ノ畑ニ生ゼシヲ昨年自園ヘ植セシカ今年始テ開花ス重瓣ニシテ其色淡紅（尋常単弁ノ者ノ如ク）其大サ寸許頗ル観ルニ堪ヘタリ尋常種子ヨリ萌芽スル者ハ単弁ナルニ如此複弁大花ヲ得ルハ奇トスベシ花蘂ヲ検スルニ雌蘂ヲ見ズ且其花ノ開クモ尋常ノ品ニ遅ルヽコト数日ナリ

明治十二年四月二十一日

田中芳男記

宅ハ東京今川小路三丁目九番地ナリ

五二九

ボタンキヤウ　服部雪斎圃中

七月紅熟ス正円ニシテ少シ高ク一方ニ溝路アリ

大サ梅ノ如ク重サ十匁許アリテ味ヒ酸甘ナリ

仝一種　今

前種ト同ク熟シ紅色ニ白粉ヲ帯ビ正円ニシテ

少ク扁ク大サ林檎ヨリ小ナリ重サ五匁許アリテ

味美ナリ

仝一種　今

前二種ニ後レテ熟シ青時ヨリ頭頂自カラ二三ニ

裂レテ殆ニ核ヲ露ハスニ至ルモノアリ熟シテ暗紫

紅色ニ至ル味モ佳ナリ重サ七匁許アリ
トカリスモノ 緑 仝
尋常ノ李ニ比スレバ熟スルコト遅ク長円ニシテ頂尖ナリ
熟スレ氏紅紫ナラズ
仝一種 紅 果尖ノ
正円ノ頂ニ敢テ他ギナキ諸ト不同起ル
形チ荊種ニ似テ尋常ノ李ト共ニ熟ス大
丸ハタンキヤウ 川崎老 仝
六七月ノ頃市井ニ上ル本形チボタンキヤウニ似テ大ノ平円大サ
径リ寸許餘 重サ二十三匁アリ味最美ナリ
紅熟セズ

駿河ノ人ノ語

駿河ニ原吉原等ノ人家ニ多ク
植ルサモヽハ上云フ灌木ハ一株叢生
シテ高三尺ニ至ル樹ニ割リ葉ハ
花ハ白色寒生シ如シ圓子ハ佳

ガ酌メ鮮色酸到迺口ニ近ラヤカラズ
熟メ紫黒色甘美ナリト
本ハ早桃ニハ也又ニハウメモアラズ
トアリ
何果ニ有ルカ

前説ノ品鑑定付本草ニ若ク和漢
柚ナラズヤ擱置ガキシテ尾此ノ紙ニ
記呈セシ者ハ詮議ニモ非ズト
信ズルヤ
僕シトンダ間違ヤラ不知ラ

和名 和活ガ柚 品物考証ニ莫芸之ヲ 花ハ総状ナラズ

漢名 葉大小不均 淡緑白花 [illegible]

洋名 実ハ花形不確 [illegible]

第廿二綱 目 実似楊梅科

灌木ニシテ叢生 高三四尺至五尺

形状 実ハ蓋膅ニシテ秋熟シ後甘美

長崎ニ自見録ニ実ハイチゴニ実ニ似テ大ナリ

産地 九州 [illegible] 山中 採

スモヽ 李

林氏第十五綱一目 自然分科 薔薇科

Prunus japonica Th.

(Rosaceae)

落葉果木ニシテ春分後新葉ト共ニ柄ノ両側ヨリ花梗数本ヲ抽

ク一長サ四五分三四梗ヲ分ケ梗頭一花ヲ放ツ黄緑色花五弁白色 一萼五裂

大サ弐三分アリ多雄蕊萼ニ着キ一雌蕊長ク柱頭鈍三稜ニシテ

微液ヲ含ム子房大サ粟粒ノ如シ

八年四月四日 博物館大傍向陽ノ地ニ慶ヲ植エル者

博覧会事務局

武州忍ノ李

武州忍ノ地ハ李甚タ多ク家トシテ三四本ヲ植ザルナシ従テ其樹繁殖シテ結果美味ノモノ多シ其名ビワスモヽト称スルハ熟シテ黄色大サボタンキヤウ位アリテ其味最甘酸美良ナリ形ニ尖頭ノ者ト凹頭ノ者トアリトゾ

右ハ片岡忠利氏ノ話

明治十二年九月十三日

田中芳男記

○ウラベニスモヽ　郁李　又　紅心李

明治十年八月武田昌次氏印度帰朝ノ節香港ヨリ
携帰ル所ニシテ其名ヲ知ラズ按ニ曾テウラベニスモヽ
ノ形状ヲ聞テ記スルアルニ符合セリ鹿児島人ハ之ヲホン
スモヽト称セリ薩摩甑島ニ多キヲ以テ林紀氏ハ既
ニ其苗ヲ取寄セタリト又長崎ヨリ来ル人ニ問フニ該
地ニテハ水菓子店ニテモ売却スル者ニシテ所々ニ植ヘタル
共多クハナシ同所公園ニモ囲尺餘ノ大樹アリト原来
支那ヨリ伝ヘ郁李ト称セリト又薩摩ヨリモ郁李ト
称シ来レリト云フ廣徳ト当否ハトモアレ該地ニ於テ

郁李ト称スルナラハ先ツ郁李トシテ可ナラン又或書ニ紅心李
ドアルハ恐クハ同物ナラン東京ニテ支那郁李ト称シ植
ルモ必ス同物ナラン樹ノ形状ハ長崎ノ人ニ問フニ花葉ハ
李ニ大異ナシト云ヘリ
今得ル所ノ数果ヲ以テ形状ヲ察スルニ形ハ稍大小アレドモ
概スルニ正圓ニシテ未尖ラズ外皮淡褐赤色ニシテ厚
肉ハ深赤色ニシテ壁ハ恰モ桃子ノ如シ味ハ甘美ニシテ
更ニ酸渋ノ気ナク横ハ李ノ如クニシテ小シ大ナルハ径一寸
一二分量七銭アリ尋常李ニ比スレハ久貯スヘシ

明治十年八月十九日　田中芳男記

○ウラベニスモヽ

嘉慶李（汝南圃史）

陽州櫻島ニ多シ樹状葉形尋常ノ李ト大
異ナキガ如シ経年ノ者ハ幹径尺餘枝條蟠屈
シテ老梅樹ノ態ヲ為ス。果形團圓ニシテ頭尖リ
凹ミ縦ニ一溝路アリ外皮黄赤色ニシテ微白粉ヲ
帯ビ肉殻紅色ニシテ宛モ凝血ノ如ク質堅緻
ニシテ尋常李ノ柔脆ニシテ砕ケ易キニ異ナリ味ハ
甘美多汁ニシテ[illegible]自ラ一
種ノ気味ヲ有ス。薩人之ヲカンスモヽト云フ即チ本李子ト尊

熟シテ上等ノ水菓子ニ供ス。暑中冷水ニ漬シ置テ食スル時ハ芭蕉実等ト位ヲ争フベシ
故ニ巨顆ニ至テハ其價モ亦タ高貴ナリ近日
内務一等属武田昌次氏支那香港ヨリ茘
子数顆ヲ携ヘ来ル気味形状彼ポンスモヽニ比ス
モノニ的当ス因テ按スルニ往年支那人薩州
坊津若クハ山川港等ニ持来シ諸方ニ繁殖
セシメシモノナラン當今櫻島ニ甚タ多ク家々庭隣ニ繁茂シ
林状ヲナス。毎年七月頃ヨリ九月頃マデハ間々鹿児島
島ニ輸出シ以テ該島産物ノ一ト為ス。他邦ニハ

甚タ少シ鹿児島ニハ往々栽植スル所アリ。又々
肥前長崎港ニテハ都李ト唱ヘ旧官園等ニ之
大株アリト云。今参考ノ為メ百品考ノ説ヲ左ニ
抜録ス

薩摩ヨリ種ヲ傳フ謬テ藩種ノ都李
トナス実八月ニ熟ス大サ常李ノ如ク円クシテ
溝道至テ深シ外皮青ク内深紅ニシテ
胭脂ニテ染タルガ如シ

明治十一年八月廿日

田代安定 識

追録

陽州櫻島ニホンスモヽノ一種ヲ子モヽト云フモノ
アリ今ニ形状ヲ忘却シタルハ惜ムベシ詳記セン
是ハ彼島ノ婦人ヲ子ト云フ者偶ホンスモヽ
ヲ播種セシガ偶々一種ノ変種ヲ得タリ
故ニ其功ヲ賞シテヲ子モヽノ名ヲ下セシト云
此ホンスモヽハ赤実ニテ果子ハ三寸ニ余ル
却スル者是ヲ以テ近年接木此接苗ヲ藩地
ヨリ移植セシト云 此樹ヨク成長セバ而后
諸方ニ繁殖スベシ。従来此美菓僻

東京ニテハ即ニ臨池設シテ世ニ顕レザリシガ今ニ遂ニ王化ニ治カルヽヲ以テ偶タリ且リ此李ノ為メニ慶賀スベキコトナリ

赤葉李 清俗ゴウリ 広田

嘉慶李

西京ニ古樹ヲ植ル家唯三軒アリ 甚内 西陣
芝大宮町十六番 吉田氏ニアル不ノ接木ニ子
共ニ 林洞海氏ヘ是ハ此樹ハ旧来栽傳ヘテ
舶来品ナリト云フ由 又尋常ノ李ニ比スレバ枝
脆クシテ折レ易ク且接木至テ難シト云フ
右苗ハ尚小木ナレバ成長ノ後ニ至リ追テ研究セン

御黄李ノ名ハ詩畫舫ヨリ取ル唐本ニ有リ

明治十四年十月六日

田中芳男記

博物局

東京大学総合図書館

種ナシ梨

種子ナシハ種子ノミナラズ内部ニ種子房ナキ
梨ニシテ一種ノ奇梨ナリト聞ク因テ其穂ヲ
田中義廉氏ニ因テ請求スルニ本日其穂貮
種ヲ得タリ即チ藤井徹方ヘ命ジテ接木
セシム

該梨ハ果ニ大ト小トノ二種ニシテ岩手縣下
盛岡下小路田鎖綱郎ヨリ同綱紀ヘ来ル所
ナリ

大ナルハ横路ノ梨トアリ卵円形ニシテ長貮寸

位アリ
小ナルハ下小路ノ梨トアリ圓形ニシテ径一寸
位アリ云

右ヲ認メシハ明十三年二月中旬ナリ此頃宍戸昌氏ニ聞クニ同氏曾テ南部盛岡ニ知己アリ年々贈リ来ル一月頃恰モ熟シテ食フベシ之ヲ鹿梨(ささなし)ノ趣アリ而シテ皮ノ儘食フニ皮ノ和キニシテ食フベキノミナラス仁ハ勿論瓤モ何モナク單ニ肉ノミナルハ甚タ奇ナルモノナリトナリ

十三年十二月十六日

田中芳男再記

マルメロ　榲桲

Pyrus Cydonia, Linn.

自然分科　薔薇科

林氏第十二綱四目

落葉果木ニシテ葉形楕圓背ニ軟毛アリ之ニ觸ルレハ即脱落ス其嫩葉嫩枝ハ殊ニ白毛多シ五月ノ中新枝頂ニ花ヲ開ク楕圓白色五瓣ニシテ香氣ナク蕚子房ヲ兼子邊縁五尖裂端反巻ス雄蘂長短不整ニシテ其數長キ者十糸短キ者九十二三糸アリ鬚根蕚ニ着キ半腹淡紅葯膜黄褐黄

博物局

粉ヲ吐リ雌蕊ハ五ニシテ根ニ白毛多ク子房ノ
中央ニ立チ柱頭黄緑粘液ヲ着ケリ

林檎奇株

青森縣東津輕郡今別村某ノ宅地内ニ三株ノ林檎アリ今
ヲ距ル十八年前移殖セリ苗木ハ林檎行商ヨリ購求セシトモイフ
然レ𪜈決シテ外國産ニアラズ其奇トスル所ハ一年ニ三回結實ス
ルナリ初メ五月ノ下旬ニ花ヲ開キ六月中旬ノ頃實トナリ八月
下旬ノ頃成熟ス其半熟スル𪜈即六月下旬ノ頃第二回ノ
花ヲ開キ七月下旬ノ頃實トナリ十月中旬頃成熟ス此實半
バ熟スル𪜈即九月中旬ノ頃第三ノ花ヲ開キ前記ノ順序
ヲ逐フテ終ニ花ヲ開カザルニ至ル而シテ第三回ノ實ハ成熟セルコトナシ

右松原新之助氏ノ自ラ該地ニ於テ実検シ帰リ示サルル所ノ説ナリ
乞ヒ得テ寫ス該品ハ恰モ三度栗ノ如キ変種ナラン歟曾テ
聞カザル奇品タリ

第九回農産品評會参考出品解説

明治十七年十月八日　田中芳男記

福島縣下岩代國南會津郡産

一　リンキ　一名　リンキン

此果樹ハ從來北國地方ニ於テ栽培スル者ニシテ「ヘニリンゴ」ト称シ漢名柰ニ充ツルモノナリ然レ𪜈柰ハ「アツプル」ニ充ツルヲ穏當トス漢譯書ニ「アツプル」ヲ苹菓ト譯ス苹菓ハ頻婆果ト同物ニシテ即チ柰ノ一名ナリ此果ハ「リンキ」又「リンキン」ト称シ「リンゴ」ノ漢名ナル林檎ヲ称スルハ必ス據ル所アラン漢名ノ論ハ今暫ク茲ニ省ク此樹ハ原ヨリ自生ニ非ス南會津郡及大沼郡ニ於テハ稀ト栽ヘザルノ家ナク大木ハ三俵餘ノ収穫アリ然レ𪜈多數ヲ栽ヘテ専ラ賣品トトナスコトナシ唯鎮守ノ祭禮等ニ販賣スル而已ニシテ尋常生食ニ供スルニ適キズ或ハ切リ乾シ貯ヘ之ヲ「リンキンボシ」ト云フ以テ乾物

農商務省

明治十七年十月十七

田中芳男

東京大学総合図書館

屎ノ滋物トス是ハ酒ニ煮テ茶菓ニ充ツルナリ
次樹ノ大ナルハ幹ノ周リ殆ト一囲モアリテ高サ二丈餘ニ達シ百年
ノ餘ヲ経シモノヽ如シ其枝頭ノ枝ハ四出シテ稍下垂セリ樹形ハ
林檎ト異ナレリ又枝細ク芽蒂ノ苹菓ト同シカラス花ハ海棠
ニ似テ白色ニ紅暈ヲ帯ヒ頗ル美ナリト云フ実ハ長柄ニシテ楕円
形或ハ倒卵形或ハ圓形ヲナス最大ナルハ径リ一寸弐分重サ六
銭アリ外皮ノ面ハ滑澤光瑩赤色鮮美ニシテ質薄ク肉ハ黄白色
ニシテ瓤小シ嫩ナルハ尚肉堅ク味酸渋ナレ𪜈適宜ニ成長シタルハ味
林檎ノ如ク尚熟シタルハ酸甘ニシテ脆軟芳美ナリ味ハ林檎ヨ
リハ却テ甚シ又苹菓ニ近シ且林檎ハ七月熟スレ𪜈此果ハ九月ニ
熟シ又林檎ハ熟シテ味悪ケレ𪜈是ハ熟シテ益〻美味ナルヲ異
トス
該地方ニ於テハ此樹至テ健全無害ナルニヨリ従来栽植スル

此二ケノ説ハ拠ナキニヨリ聊テ心覚ヲ記ス
故ニ農會ニ問フト尤モ是ナラン

ト雖モ未タ良好ノ種類ヲ撰ブニ非ス多クハ種子ヨリ繁殖スルモノヽ
如シ近年ニ至リ接樹スルモノアリ又林檎ノ砧樹ニ用ウルト云フ然ラハ
苹菓ノ砧樹ニモ適スルモノナラン

ヤマナシ

明治十七年九月十八日越后長岡ニテ栽培スルモノヲ得ルモノニシテ
樹ノ高サ六七尺余アリ葉ハ長楕円ニシテ尖ルモノハ外ニ二出葉モ
アリ枝ヲ折ルニ折レ易シ是ハ本草図譜棠梨ノ条ツミカイド
ウ赤棠ナルモノト同シカラン

ヤマカイドウ 一名 ミツバカイドウ 棠梨

明治十七年九月廿四日岩代安積郡及猪苗代湖辺ニ自生シ高
サ六尺ヨリ七八尺アリ灌木ニシテ叢生スル多シ又枝尖リテ刺状ヲ
ナスアリ実ハ多ク結バス稀疎ナリ枝折レ難ク裂ケルナリ皮内
即黄茶色ナリ 信州ニテ コナシノカハ ト云ヒ染物トナス

農商務省
東京大学総合図書館

福島縣下岩代國北會津郡産

一マルメロ　榲桲　Quince.

此果ハ寒地ニ適スルモノナレバ陸奥越後等ニモ多クアリ又岩代ニテハ若松辺ニモ多ク栽ルナリ然レ圧九月下旬ニ採ルモノナレバ未タ成熟ノ期ニ至ラズ故ニ味モ亦美ニ至ラズ近年欧産ノ者アリ果形較異リ是亦寒地ニ非レバ良果ヲ結ニズ

同　岩代國猪苗代湖辺産

一コケノミ　鶴子果　譯名　Cranberry.

是ハ湖辺「ミヅゴケ」ノ密生スル卑湿ノ地ニ自生スル「ツルコケモモ」ノ実ナリ此植物ハ越橘科ニ属スル常年不凋ノ細茎植物ニシテ茎長サ一二尺地ニ匍匐スル圧梢頭ハ立チテ一寸餘ノ細柄上ニ実ヲ結ブ其柄ハ脊立シテ末下垂シ実ヲ着ク其大ナルハ大豆ノ如ク小ナルハ小豆ノ如ク大小一様ナラズ円形ニシテ較扁ナルモノアリ白色紅暈酸気多シ熟シテ全赤色ニ変シ較甘酸トナル此植物ハ日光赤沼ケ原ニ多シ又西洋ニモ同様ノモノアリ皆湿地ニ自生スルモノナリ外ニ一種米國産アリ是ト較異ナリテ実尚大ナルノミナラズ園圃ニ栽培繁殖セシメルヲ得ベキ一個ノ果産ナリ此品ハ曾テ勧業寮ニ於テ米國ヨリ取リ寄セシヿアリ今尚各地ニ存ス譯シテ米國産鶴子果ト云フ（American Cranberry）

若松ノ人曰ク此実朝ハ柄立ツユヘ採易ク日中ハ地ニ伏シ採ルニアシト

スナシ 信州方言 物品識名ニスナシノズミ見ヘタリ 甲州ニテハ大小共ニズミト云 小ナルハ小草梨ナリ

林氏第十二編 三月

信州甲州又小河内通山野ニ自生アル薔薇科ノ樹ニシテ（木ハ高数丈ニ至ルモアリ）葉形楕円又三裂ノ者アリ大鋸歯ヲ具ヘ（鋸歯粗大）縁ニ面背共ニ白毛アリ（嫩葉ノ時最多シ）中春花ヲ開ク候紅色五朶ヲ頂生ス花ハ四五弁アリ季秋ノ候ニ実熟シテ紅色形梨子ノ如クニシテ小ナリ外面粗糙ノ小点アリ半截シテ之ヲ見レハ径リ八九分ヨリ寸ニ至ル

食 味酸渋ニシテ耐ヘス之ヲ蒸シ熟エシハ渋味ナリ

博物局

東京大学総合図書館

甘酸ヲ帯ナリ　乾シテ山査ノ代トシ　和ニ山査子ト称シ　魚ノ骨ヲ抜ク薬
中共ニ生ニ肉ヲ以テ薬ヲナスヲ良
桝ノ樹皮ヲ剥キ小葉ノズミ又ハ染料トナス深紅
之ヲ梔シテズミ皮ト云　但シ小ミ木ノ上等ナリ
十一月十二日記

タウビハ

明治十二年六月長崎ニ至ル同所ニテハ枇杷ハ小実ナレ皆大実ニ
シテ東京ニテタウビハト云フモノナリ之ヲ清音ニテヒワト云フ
長実ノ若クビワト称シ決シテ混スヘキナシ其タウビハハ如キ
モ垂テ大実ノモノアリ大サ梅子ノ如ク而シテ枇杷子ツ下種ス
レバ又大実ヲ生シ小粒トナラナシヨツテ国ニ其種子ヲ携ヘ
帰リ今川小路実ノ畑ニ蒔キシカ忽チ発生スルニヨリ其冬
保護ヲ加ヘ寒気ヲ防キタリ十四年冬上野官舎ヘ移転ス
ルニ際シ三本ヲ抜キ取リ庭ヘ移シタリシカ昨年官舎ヲ
出ルニヨリ二本ヲ抜キ尚一本ヲ残シ置タリ　天産課

ニテ入用ナラバ好時候ヲ図リ移植セラレタシ但シ夫迄ノ
所保護ノ道ナラバ採擱セラレシ札デモ立置セラレタシ
十七年三月十日
天産課御中　田中芳男
尚官舎ノ庭ニ椎栗数種ヲ下種シタリ今年
ハ生シテ三年目ナリ是モ入用ナラバ移上可申
両様ニ候

或人ノ話
服部待雄ト云フ人目黒辺ニ一邸ヲ求メシニ邸内ニ枇杷
二三株アリ其内長実ノモノアリ目黒辺ハ枇杷ニ適
スル地ニテ外ニモ長実アルヤ否ハ知ラズ
同人ノ説ニ長崎ニハ長実ノモノ珍シカラズ尋常ノモノハ
ヒワト称シ長実ノ者ヲビワト称スル由タウビハノ
長大ナルモノヘトリ
按ニ支那ノ何ソ久タウビハノ又名ノ様ナラン
武田氏中書ニ支那ノ携ヘシモノゴジ安民子ノ苗ケ
一ヲト

枇杷苗

枇杷ハ通常陰湿ノ地ナレバ容易ニ種子ヨリ發生スレドモ皆冬月ノ寒ニ傷ムモノナリ故ニ小嫩苗ハ勿論一尺許ニ至ル迄ハ冬月護寒ノ法最モ所要ナリ

長崎ニテハ尋常圓形ノ者レドモ皆形大ナリ或ハ径寸許ニ至ルハ繁ク之アリ｜ヒワト清音ニ呼ビ長形ノ者ハ｜ビワト濁音ニ呼ブ且其種子ヲ下シテ生シ易ク母樹ノ實ニ劣ルコトナシト云フ

今年同地ヨリ圓形大粒ノ種子ヲ携ヘ來リ六月下旬自園ニ植ヘタリシガ八月ニ至リ發生シ方今

三寸許ノ小苗トナル
尋常ノ種子ハ其次年ニ栽レハ発生スル了ナキヲ常トス
此枇杷ハ其年直ニ発生スルモノト見ヘタリ

十三年十一月三日

田中芳男記

柳実ノ落ルヲ防ク法

田中房種曰麻布邊ニテハ柳ノ実落ケ易クシテ尤稲毛辺ニテハ更ニ落ル患ナキニヨリ試地ヲ穿鑿スルニ矢張虫入リ落ルノ患アリ別ニ換ル了ナシ唯之ヲ防クノ一方アルノミ其方法ハ柳実ノ漸ク結ヒ大サ頃ヨリ毎夜樹下ニ落葉枯草ノ葉ヲ集メ火ヲ点シテ土ヲ蔽ヒ薫燃セシムル了終宵ナリ大低久許攸ヲ爐スノ頃ハ火ヲ点シ終夜火ヲ絶サラシメ務メテ烟気ヲ樹葉中ニ籠ラシムル了凡一ケ月許

ナリ之ニ因テ夜盗ノ来リテ柿蒂ニ卵ヲ着ヘ
患ヲ免レ且ツ烟気ヲシテ樹木ヲ養フノ効アラシム
此法ハ何又其理ヲ辨テ而后発明スルニ非ス
偶然自得ノ方ナレ𪜈大ニ柿実ヲ落サヽルニ効
アリテ房地ノ蔗物ヲ絶ヘス生サシムヘキナリ杏ハ村
里ニ致スモノナレ𪜈兼テ東ニハ漫ニ行ヒ難シ尤モ火
気ニ注意ノ方法ヲ立レハ平行フ道アルヘシ此他ノ
菓樹ニテモ多クハ夜間ニ夜盗甲虫毫虫ノ患ヲ
醸スモノナレハ行ハ必ス効アルヘシ

明治十一年九月十九日

田中芳男記

甘柿ニ渋味ヲ残スノ説

曽テ美濃ノ人ニ聞テアリ接木ハ必ス渋柿ナルヘシナレハ
接クト深ク挿ム中ハ接着ニハ固シナレ𪜈実ニ渋味ヲ遺
スノ患アリ五分位ノ挿シテ接タルハ渋味ナシ故ニ柿実
ニ渋味ノ有無ヲ撰ニテ接木ノ巧拙ヲ知ルト云フ
田中房綏曰ク稲木ノ方ニテハ柿実ノ渋味去リ兼ルハ
全ク接着ノ井深ク挿シ過ヘノ致ス所ナレハ接木ノ際
成丈ケ挿ムヲ可トス右又樹ノ肥瘠ナル時ハ実太ナ
ルモ渋味去リ難ク痩セ込ム又久シハ実小ナルモ渋味早ク去
ナ紅色トナルモノナリトゾ

中島俗山畠ニテ太キ臺ハ四本ノ穂ヲ接ニ二本ノ穂
ナカ接着シテ成長殊ナレハ一本ハ甚メ不十分ニテ
接着スル下ノ方ヨリ僅カ着スルニテアレハ枝モ堅クナサレハ
実ハ他ノ二枝ニ比スレハ早ク渋味ヲ去リテ食スベシ
熟スルトキハ前説ニ符合スリトアルし

明治十二年九月二十日
田中芳男記

柿ノ名

ミヅヒラ　味不佳核偏扁　セイ様クヒテ稜四アリ
リヨウノ玉　味佳　核偏ヒ　大キク丸ヒ百目柿ノ類ナリ
竈ノ子　味佳　リヨウノ玉ニ似テ少ヒ細長ク頭尖ヒリ
右三種　庄野亀山辺
スキトリ　摂津住吉　形円ク味佳
ヨテラ　扁ク小ナリ　土山辺ヨリ石薬師辺　元ハ江州ノ産ナリト云
マスクラ　乞ク小ク味不佳
フジサン　セイ高ク先尖ル　四日市　若川辺
スルガゴシヨ　原川辺

ヨロイドヲシ　セイ高ク先尖ル　岩花立場辺

ホウジン　丸クホナリ　菊川辺

トウハチ　島田駅辺　セイ低シ

ニタリ　セイ短ク而シ味ヨロシカラズ　三嶋ヨリ熱海辺

ゲンニュウ　熱海ノヒラクシ味不佳

ヤツムチ　京師ノ産

梅尾　京師ノ産

テンリウ　形大ナリ百目柿ノ如ク周囲六寸余ニ至味佳也

以上十六品形味各異ナリ味ノヨキテンリウニ超ルモノナシ

柳樹一種ノ果実

夫果実ハ米人某カ教育博物館手島ヘ寄贈

シモノニシテ田氏ハ其名称[illegible]詳悉セルヲ以テ杉山氏柄

氏ハ之ヲウラウドンノ[illegible]トナシ

テ田某氏ヘ示サレシニ田某氏之ヲ深ク[illegible]

之ヲ薩摩ノ人クバリニ一瞬セシニ田人カ千八百七十三年

頃太平北洋諸島[illegible]ボナペイホコリユ[illegible]

[illegible]草ノ苗ニ於テ集ヘ目撃シタリ

当時写生セシ絵アレリ持帰ルヘシト[illegible]前章

シ図ヲ示シテ田氏ハ[illegible]不経高ナ

ルヘシト思シハ其種ヲ[illegible]其図ヲウラウドンノ[illegible]

[illegible]其図ト比較スヘシ其実ハ大ニ白シト色ハ

其樹ノ全形状等ノ異ヘ大ナ[illegible]其実ハ稀ニ[illegible]

東京大学総合図書館

冨士麓ノ曾我柳

明治十年八月九日　田中芳男記

冨士ノ麓曾我墓ニ一種ノ柳アリ曾我柳ト
云フ葉上ニ曾我氏ノ紋干ノ如キ紋アリトソ

此ヨリ以後之ヲ缺ク也

十五丁ヨリ廿丁

信州ノ黒柳

信州伊奈郡立石村ト云ヘル柳ノ名産ニシテ（上等ハ）釣柳
（下等小キハ）串柳（下等）ト呼ビ出ス 其味他村ノ苗ニ接ギ同村ノ郷村ナル
伊豆平村ノ産之ニ亜ク 其他ノ村々モ大ニ作リ出セルモ
其産質ハ下等ナレドモ皆立石柳ノ名ヲ以テ販売スル由
右樹ノ老株ヲ切リ黒柳ヲモ得レドモ多クハ上等トスルハ
豆柳（信州方言コガキ）ノ老株ニシテ幹中ニ腐蝕ヲ生
ズルモノハ幹ヨリ良好ノ品ヲ得ル由 醤油ニテ重ニ
（従前ハ目方百目ヲ銭百文ニ売リシモ今ハ然ラズ）其他ノ
白柳ヲ鉄気アル水ニ浸シ黒柳ヲモ作レドモ質軽粗ニシテ

用ニ足ラズ又他ノ澁柹ヨリ得ル黒柹ハ縞ニナリ文色
澤不良ニシテ佳ナラズ右泥ハ渋柹ヨリ取ルヲ常トス
豆柹ヨリハ取ラズ但シ豆柹ノ実ハ乾シタルモノ一升ノ代
金七八銭ノ價アリトゾ
右三名柹ハ接木セシコトナシトゾ
因曰山形縣下柹樹多シ黒柹ハ多ク鉄水ニ浸シ製スルハ
ニツ品位下等ナリ板面ニ緑青色ノ斑ヲ生ズルコトアリ
但シ大材ヨリ出ル真材上等ト称スルハ鶉(ウツラフノ)斑ト名クルモノ
ニシテ其斑紋鶉羽ニ似テ良好美麗ナリトゾ

明治十年九月十三日

田中芳男記

日本ノ白無花果熟スレバ開裂シ次第ニ割レテ遂ニハ全ク四個ニ反裂シテ更ニ圓形ヲ存セザルニ至ル
九月十八日再記

無花果

無花果ハ旧枝ニ結ブハ早ク熟シ新枝ニ結ブハ遅ク熟ス故ニ旧枝
ニ去年熟シ残リタル豆大ノモノ今年ニ至リ次第ニ生長スレドモ多
クハ小ナル中ニ落ツルモノナリ漸ク残ルモノハ七月中旬ニ至リ既ニ
熟シテ食フベシ且今年ノモノヨリハ形大ナリ今年結実ノモノ
ト発枝ノ成長スルニ任スレバ枝ノ勢ニ壓セラレテ実ハ唯ニ
数ヲ増スノミニテ熟スルニ至ラザレバ必ズ枝頭ハ切去テ枝ノ勢ヲ
殺ギ実ニ勢ヲ添ル様ニスベシ
日本従来ノ品ハ実大ニシテ紫色酸味多シ下等ナリ又白肉
モノアリ形小ニシテ圓シ味ハ甘ナレドモ美ナルニ至ラズ

博物局

白ハ外面黄白色ニテ肉部モ亦黄白色ナリ
紫色ナルハ当紫褐色ニテ内部モ亦白ニテ紫ヲ帯ブナリ

西洋種ニ白ト紫トアリ白ノ方味美甘大ニ紫ニ勝レリ（紫ハ四五分アリ）
七月中旬白ノ最大ナルハ二寸八分アリ
此樹東京ニテハ卑湿ノ地方ニ最適シ樹ノ成長速ナリ
然レトモ結実ノ佳ナルハ必ス老大ノ樹ニ限レリ
又樹幹ニ蠹虫ヲ生スルモノナレハ若シ生シタルヲ見レハ
銅線ヲ通シテ虫ヲ殺シ又石炭油塩水類ヲ注
入シテ虫ヲ殺スベシ

明治十一年七月十七日　田中芳男記

五四九

○楊梅ノ効用

楊梅ハ東京ニ於テハ唯盆栽又庭園ニ植ルノミニシテ殊ニ
稍実蔵ヲ長シテ大樹トナル少シ
其効用ハ外皮ヲ以テ染料ニ用ルヲ以テ染料商ノ毎
ニ販売スル所ニ羅ル是渋質ヲ含有スルヲ以テナリ
其実ハ二ノ月ニ至リ熟ス赤ト白トアリ熟スルモノハ其味
甘酸美ナリト然モ苺子ノ如ク速ニ腐爛スルノ患アル
ヲ以テ遠ク輸送スル能ハズ故ニ東京ヘハ房州地方
ヨリ輸スト然モ形小ナルモノナレバ味モ亦良ナラズ
原来楊梅ハ暖国ノ産ナレバ東京ヨリ北地ニナリ近国ニテハ

安房及伊豆ニ見ル、中国ヨリ九州ニ至リテハ愈多ク且実モ
大ニシテ美味ナル由ナレド東京ニテ其美味ヲ知ルニ由ナシ
支那ヨリ実ヲ携来ル者ハ大実ナレド中国九州ノ者ヲ以テ比スレハ
格別大ナリトスルニ足ラズ
此実ヲ結ブノ地ニテハ是迄生食スルノミニシテ他ニ貯蔵法ナク或ハ酒
ニ醸スコトモ未ダ十全ニ至ラズ因テ是迄廃棄スル事多シ就テハ
西洋ニテ梅酒ヲ製スルガ如ク酒ニ醸シ又焼酎ヲ取リ又蒸テ
ジャム及ビゼリーヲ作ラバ貯蔵ニ良ナルヘキナラン又以テ
廃物ヲ有用ニ帰シ一個ノ物産トナスヲ要ス

明治十年六月十三日

田中芳男 記

ヤマかこ
落葉灌木ニシテ三月花ヲ開ク 初メ花萼
四片相抱合ス其ノ色黄褐微毛アリ破裂
スレバ長柄ノ数花ヲ吐出ス四瓣破針状ニ
也雄蕊四箇子房 出テ 葉褐毛一雌
[illegible] 中 中 [illegible] 桐集中央ヨリ出
桂 色青黄也 後 [illegible]

リウバイチゴ 仮称 又 アサイチゴ 仮称

林氏第十二綱第五目
自然分科 薔薇科

Rubus sp.

東京白金村松平讃岐守旧邸現今ハ海軍省ノ用地後部ノ方三田村ニ接スル叢林中満地ニ繁殖シテ白色ナルト疑ハバ全形カヂイチゴトキイチゴノ中間ニシテ葉背白色ナラズ形三裂又五裂ノモノアリ三裂ハタリ五裂ハサシ周縁ニ細大ノ鋸歯アリ

~~幹~~茎枝幹ハ刺ナク又毛

ヤマグミ

山茱萸

林氏第四綱一目
自然分科 山茱萸科

灌葉木○高サ二三尺ヨリ八九尺ニ至ル中花ヲ開ク四片ノ苞アリ二片互ニ抱合ス其色黄褐ニシテ微毛アリ縦裂スレバ中ヨリ花梗数本ヲ長出シ細小花ヲ叢出ス各四弁数針状ニシテ外反ス花蕊四雄子房ノ下邊ニ附着キ互ニ黄腺黄褐黄粉ヲ吐ク一雌蕊稍太ク柱此青黄色ニシテ○微液ヲ含カス

萼田ナク平開ニシテ他ノイチゴ類ト異ナ
レリ四月ヨリ五月ノ初メ新枝梢葉腋
ニ花梗ヲ出シ分叉シテ各頂ニ五弁ノ白花
ヲ開ク毎弁淡紅ヲ帯ブ全花ノ径リ一寸二三
分ニ過キス 熟事無名狭ヲ知ラス同書ニ
備ヘス又知ラズト紛ハシキ者アルヘシ因テ前記ノ
二名ヲ掲ケテ後学ニ来リ識者ノ正
教ヲ俟ツト云爾

蓋此レ是ノ過ハ田中方種氏ノ書ニ因テ
吐露セシ所ナリ

明治十三年五月写　小野職愨[illegible]稿

ナハシロイチゴ

蒔田藨

林氏第十二綱廿第五目

自然分科 薔薇科

Rubus parvifolius. Linn.

落葉蔓本様ノ植物ニシテ枝幹不整匝蔓鈎刺
多ク嫩幹毛茸アリ毎葉三箇一柄複鯪状ニシテ辺
縁欠刻鋸歯アリ（裏面緑白色）夏月枝頭葉腋花梗ヲ長出
数梗ヲ分チ花ヲ開ク萼ハ披針状尖頭五裂シ外内軟
毛アリ花倒卵形五弁ニシテ紅色甚タ開カス多雄蕊

博物局

東京大学総合図書館

葉ニ対シ着キ花緑淡紅十萼腹ノ茶褐花数同一多雌
蕊中心ニ集生シ柱頭少許ノ粘液ヲ含ム
七月果熟シテ紅色形蛇苺ノ如ク甘味ナリ

明治七年十二月四日記

トチバイチゴ 仮称

林氏第十弐綱 目

Rubus sp.

自然分科 薔薇科

明治九年八月神田神社ノ北邊山腹ノ陰地ニ自生ス根
地中ニ延蔓シテ所々ニ一茎ヲ抽ク高四五尺許略蔓様
ヲナシテ毎葉互生ス茎、葉、葉柄共ニ毛刺或ハ小刺アリ
葉柄茎ニ着クノ処互ニ屈曲ス、柄長サ三寸許 全
葉五片ニ分レ一片ノ形披針状ニシテ端ニ細鋸歯ア
リ殆ト人参葉ニ似タリ、薔薇科ノ植物トナス疑
ヲ容レズ 余發穗ノ時花実ヲ観ズ後日開花ヲ

内務省

トシテ評説ヲ記セントス

九年八月廿二日

横川政利述稿

一枝ヨリ二ノ果ヲ附着スルアリ

サコンノタチバナ

官園 廣瀬直水方ヨリ来ル

葉形卵円鈍鋸歯アリ冬月果熟シテ鮮黄形平円味柑ノ如ク大サ包橘ヨリ小ナリ

味酸苦食フニ堪ヘス

雲州ミカン

異名 温州ミカン タウミカン

雲州ノ名産ニメ其名尤モ高シ形チ平扁ニメ肌理細緻ナリ大ナルハ香橙ノ如ク小ナルハ乳柑ノ如シ時トメハ䪥瘤アツテ「ナカミマミカン」（長崎ノ名産）ニ類スルモノアリ其色ハ淡朱ニ微黄ヲ帯ブ皮ハ厚クメ皺紋アリ稍甘味アレ𪜈敢テ食フベキニ非ス毎顆大約十弁ヲ収ム弁密接シテ瓤充満ス味頗ル甘美稠厚ニメ核ナシ憶フニ一樹ノ内稀ニ有核ノ顆ヲ結フナルベシ日ヲ経レバ皮漸々

十二年十一月写

東京大学総合図書館

乾縮シ瓤更ニ実シテ一層ノ美味ヲ添フルガ如シ即今東京ノ市街ニテ販賣スルモノハ大概紀州ノ産ニ係ル其他伊豆駿河相模等ヨリモ出ス然モ漿少メ味遙ニ劣ルト云

此品蜜柑類中ニテ味ヒ上等ニメ久ク保存ノ用ニ堪レバ世人大ニ之ヲ貴重ス東京ニテハ大ナルモノ三四銭小ナルモノ五十文ニ下ラス洋客尤モ之ヲ嗜ムト云或曰皮ニ疵瘤アルモノ久ク貯フルニ可ナル由

明治十二年三月十五日

田代安定記

土佐産唐蜜柑

唐蜜柑ノ称ハ他國ニ同名アリト雖モ皆蜜柑類ニ外ナラス然ルニ従来土佐ノ國ニ産スル所ハ全ク蜜柑類ニ非スシテ一種特別ノ者ナリ其實ノ形正圓ナルコ橙ノ如ク其大サモ亦橙ニ均シ而シテ又高ホナル者アリ其樹形ハ尋常ノ蜜柑ヨリ長大ニシテ葉モ亦彼ヨリ大ナリトス此樹ハ土佐ノ各地ニ植レ𪜈吾川郡西分村廣岡村森山村其他高岡郡高岡町近村産出最多ク其樹ノ性タル頗ル強壮ナレバ成長ナリ易ク大ナルハ幹ノ径八九寸ニ至リ結果スルコ極メテ多シト云フ其来歴ノ詳ナルコハ未タ知ヘカラサレトモ栽植ノ久シキハ其樹ノ大ナルヲ見テ知ルヘシ　舊来蜜柑ト同視シ蜜柑ト同時ヽ食スルヨリ毎ニ下劣ノ評ヲ免レズシテ其聲價ヲ得サルハ是其長所ヲ取ラサルノ致ス所ナラン此果ハ外面ニ陣窪ナルアリ皮色ニ濃淡ナルアリト雖モ概子其質緻密ニシテ瓤囊ト

密着シ瓤内液汁ニ富ミ其味最モ甘酸優美而シテ貯蔵ニ適スルヿ尋常蜜柑ノ遠ク及ブ所ニアラズ故ニ保存宜キヲ得レバ貯ヘテ五六月ニ至ルハ勿論七八月ニ至ルモ亦甚ダ難カラズ以上挙クル所ノ如ク此果ノ形状性質香味等総テ西洋ノ甜橙（ヲレンジ）ニ同キヲ以テ蜜柑既ニ尽ルノ後ニ至リ之ヲ食卓上ノ需用ニ供セバ決シテ西洋品ニ劣ル者ニアラズ甜橙ハ是マデ本邦ニ産セズ唯九州地方ニ類似ノ品アリトセシガ今此唐蜜柑ノ種アル時ハ何ゾ西洋ノ甜橙ヲ羨ムニ及バン今ヨリ後益々此果ノ良種ヲ繁殖セシメ其栽培ニ注意シ益シ貯蔵ノ方法ヲ研究シ専ラ盛夏ノ果食ニ充テバ其効用ノ多キヿ長門ノ夏橙淡路ノ鳴門蜜柑等ノ比ニ非ルベシ小官此地ニ来リ其果ヲ目撃シ大ニ感スル所アリ因テ前文ヲ述ベ其果ヲ添ヘテ之ヲ貴下ニ寄ス貴下若シ之ヲ宮内省ニ呈シ辱クモ
叡覧ニ備フルヿヲ得バ実ニ此果ノ幸福ナルノミナラズ土佐国産ヲ増加スルノ栄ヲ得シ誠惶頓首

明治十七年六月九日

高知ニ於テ

元老院議官　田中芳男

高知県令田邉良顕殿

唐蜜柑ノ說

土佐郡湖江村桑　高橋重嘉

一唐蜜柑種類ハ此菓種ハ素ト何ノ頃何國ヨリ傳来シタルヲ知ラス蓋シ唐蜜柑ト名稱スレハ漢唐ヨリ来リシモノ歟専ラ當國ニ蕃殖ス其種類ヲ細別スレハ凡二種アリ

第一種ハ形状正圓皮面淡黄色ニシテ緻密(コマヤカ)滑澤(ナメラカ)ナリ其味甘酸相半シテ佳美ナリ之ヲ通常唐蜜柑ト稱ス

第二種ハ形少シク長圓ニシテ皮膚稍粗ク强壯ナルヲ覺エ紅色ニシテ佳香ヲ帯フ貯蓄上最モ便ニシテ殆ト翌年夏期ニ至ルモ色味共ニ變セス收利随テ多シ近来ハ廳下以西ノ地ニ專ラ繁殖ス之ヲ赤唐蜜柑ト云フ

別ニ一種大唐蜜柑ト稱スルモノアリ形海紅柑(ジヤガタラ)瓜哇柑ニ似テ上下共豊圓ニシテ皮厚ク青黄色ヲ帯ヒ甘酸佳香アリ貯蓄ノ便赤唐蜜柑ニ同シ而シテ樹葉頗ル強剛(リヤウカウ)壯大ナルモノナリ

一苗仕立法　大唐蜜柑ハ幹枝強壮ニシテ頗ル成長ノ速ナルモノナレハ砧木(ダイギ)ニ試ミシヿアリ該仕法ハ則チ其果實ヲ能ク熟サシメ其核子良全ノモノヲ撰ミテ貯置キ翌春発芽ノ候ニ先チ其核子ヲ米泔汁ニ浸シ（之レハ種子ニ細土ヲ附着セシメン為ナリ）播種スヘシ苗床ハ寒中ニ墜シ作リ土七歩ニ軟砂三歩許ヲ加ヘ再三鋤返シ置キ播種十日以前馬糞ニ牀下水(ユカシタミヅ)ヲ調和シテ苗床ノ肥糞トス

一接木ノ法　砧木三年目ノ春接木床(ツギキドコ)ニ移植シ而シテ四年目ノ春接穂ノ芽斷ク肥ヘ寛(ユル)ミテ十分ノ生意ヲ含ミ稍色澤ヲ着ケタル時（右ノ好時節ハ彼岸ニ五六日間）ヲ見計リセシテ接木スヘシ接木スヘシ接穂ノ擇方(エラビカタ)ハ前年生ノ枝或ハ小幹ノ中太サ箸(ハシ)位ニシテ日表ニ向ヒ勢力能ク延ヒタルモノヽ先後ヲ切捨テ中部ヲ良トス

一栽培及肥料法　前年大寒中油滓(アブラカス)鶏糞及糖等ノ三物ヲ調和シ之ヲ成長糞トス熟果前秋冬ノ前魚汁ヲ澆キ美味糞トス其他混合（魚肉蔬菜ノ残屑味噌糟類塵介煤灰草木落等諸ノ廃物ヲ一所ニ集メ腐熟セシメタルモノナリ）ヲ造リ適宜培養スル常務トス

一虫病驅除法　枝葉ヘ蟻(アリ)及ヒ煤(スヽ)ノ付タル時ハ入湯後ノ熱湯ヲ數回澆クヘシ又朝露ノアル中カ或ハ小雨ノ降ルトキカニ土灰ヲ枝

東京大学総合図書館

葉ニ振リ掛ルヿ数回ニシテ駆除スヘシ二法共ニ實功アルヲ見タリ

一貯蓄法 惣テ果ヲ貯ル為ナ採實スルニハ頗ル好期アリ之ヲ誤ラサルヿ緊要ナリ藪下ノ竹葉ヲ集メ三寸許ノ厚サトシ其上ニ菓実ヲ並列シ又竹葉ノ類ヲ積ミ重子寒中ハ其儘置キ而メ春雨ノ降ルニ先チ活ケ替ヲ要ス活ケ替ノ法ハ桶ノ類ニ蕎麦ノ藏居又ハ米糠ノ類ニテ詰ルヿナリ又生ヒ茂リタル柑樹ノ根元ヘ松葉ヲ布キ之ニ果実ヲ並列シ上ニ松葉ヲ積ミ重子藁ニテ大雨ヲ凌クヿニスヘシ貯蓄セント欲スルノ期迄常ニ空氣ヲ入レサレハ色味鮮美ナリ

アカミカン

朱柑（本綱）

薩州家々庭際ニ栽植ス小木ニメ能ク実ヲ結ブ初冬已ニ赤色ヲ染ム晩冬ニ至テ益赤ク纍イ枝間垂テ愛スベシ全形尋常ノ「ベニミカン」ヲ指之紀州産ニ比スレバ肌理細滑ニメ色更ニ赤シ大ナルハ香橙ノ小ナルモノノ如ク小ナルハ「紀州ミカン」ノ大ナルモノノ如シ毎顆大抵十弁ヲ以テナル瓤軽虚ニメ皮ト離レ易シ味ヒ淡甘ニメ酸味ヲ帯ビ漿少シ故ニ日ヲ経ル片ハ水気減却シ酸味漸ク脱

ス核円小ニシテ多ク気薄シ
此品ハ前説ノ如ク味肌理美麗淡泊ニシテ上等
ノ果ニ供スベシ然レ氏皮薄ケレバ久保ノ用ニ
堪シ

明治十二年三月十一日　田代安定記

べニミカン　一果ノ量凡八九匁アリ

朱柑　猪所 閩南 閩史　支柑 同上

自然分科　橙科

林氏綱目　第十六綱第三目

産地詳ナラス官園ニ培栽スルヿ久シ葉形橢
圓全辺ニシテ質稍薄ク面ニ光澤アリ五六月
ノ間白ソ花ヲ開ク翌年十二月ノ頃果熟シテ帯
黄赤色ナリ形包橘ニ似テ皮厚ク種子尤多シ
然レ氏其味ハ甘微酸ニシテ八九分佳ナリ

本草啓蒙云フ中府解考之し

明治十一年二月十五日 小野職愨

べニミカン

本年ハ柑橘類ノ結果盛ナリト見ヘ府下ニ販賣スル蜜柑乔 雲州蜜柑 華美ニシテ大且廉ナリ外ニ朱欒 枸櫞モアリ 此べニミカンモ赤果店ニアリ紀州ヨリ来ルトイフ 尋常ノ蜜柑ニ比スレバ外皮ノ色紅赤ニシテ 橙子ノ色ニ似テ更ニ尋常品ノ如クナラザレバ外着殊ニ美麗ナリ 熟シテ之ヲ食スニ皮ノ質緻密ニシテ 甌子ノ如キ小凹孔多クアリ 且蜜柑ニ比スレバ圓ク 橙子ノ形アリ 而シテ皮ノ香気ハ橙子ニ似テ蜜柑ノ如キ芳香ナク苦味アリ

瓤ノ味ハ蜜柑ト大異ナケレドモ膜多ケレバ品位劣レ
トスベシ又核ノ多キコト一顆中ニ廿六粒モアリ
到底外看ノ美ナルニ供スベシ食用ニハ不適ナル
モノナリ

明治十三年十二月廿四日　田中芳男記

冬月ノ保護ハ唯蓆ヲ東西ノ圍ニ設ケ包ミ又追テ採リ色ニ随ヒ連枝ヲ樹ヨリ切リ取ルナリ

宮島氏ノ蜜柑　タウミカン也

麹町區飯田町二丁目宮島信吉氏ノ庭中ニ植タル樹
ニ結ブ所ニシテ素ヨリ氣候ノ十分ナラサルヨリシテ
形モ大ナラズシテ瓤多ク色モ金黄ニ至ラズ切リテ試
食スルニタウミカン又ノ子ミカンノ如ク尋常ノ蜜柑
トハ異ナリ庭ニ至リ栽培スル所ヲ見ルニ樹ノ
高サ二尺許ノモノ數本アリ皆縁日ニテ結果ノ鉢
栽ヲ求メ帰リ植タルモノヽ由外ニ尋常蜜柑モ
アレド樹尚小ニシテ結實セズ且此樹ハ皆尋常
蜜柑ト異ナリテ葉闊大ナリ

東京大学総合図書館

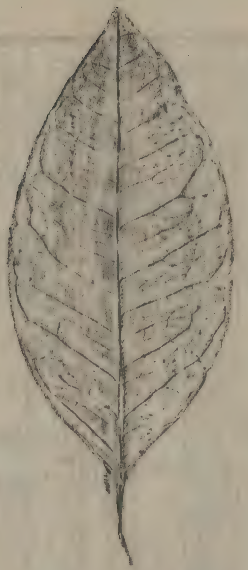
唐タウミカンハ蜜柑ニ似テ形大ク且蜜柑
ニ比スレハ形クネンボニ近キモノニシテ瓤ハ蜜柑
トクネンボノ中間ニアリ皮ノ味及ヒ香等ハ尤モ
クネンボニ近シ又四国ヲ始メ其他ノ周
クニ形正圓ニシテ外皮黄色ニシテ金黄ナラス
味等總テクレンジニ同シトイフ其ハ此年
讃州多度津ニテタウダイ〳〵ト称ヘタル
ヲ試食スルニ同物ナラン

明治十四年一月六日　田中芳男記

中島蜜柑トイフハ大隅山崎名産ニシテ他ニ比類ナキ良
品ナリトハ兼テ聞及ヒシニヨリ同県勧業課蕃木
千足氏ヘ依頼セシニ廿度同氏周旋ニテ該地ヨリ取
寄キ且田中島ハ大隅山崎市街ニ接スル地名ニテ此
果樹ヲ栽培スルヨリ此名アリトイフ
其果ハ東京ニテヨミヌ常ナトスル蜜柑ヨリハ較異ナリ且
形ハ似タレモ大アリハアリ色濃厚ク外面ニ疵アリ多クハ
満面瘢瘤恰モ獅子蜜柑ノ如シ又滑ナルハ膚ノ
疵アルハ次第ニ厚シ種子ハ無キ方多ク或ハ二三粒
アリ味ハ甘美ナル雲州蜜柑ヨリハ較劣ルカ而シテ大ナルハ
二寸三分径二寸三分高サ壱寸七分小ナルハ壱寸五分余
アリ原来味ハ美ナレモ外面ノ形瘢状又疵多クシテ

其観ハ美ナラズ且味モ亦酸味ニ過ク又皮厚キヲ以テ上品トハ云ヒガタシ　葉ハ羽翼ナシ

長崎　中島蜜柑ノ葉　柄ニ翅ナシ



明治十五年一月二十五日　田中芳男記

十五六二

此名ハマルタ島ノ名ニシテマルタヲレンヂトモ云フモノナリ

ヲレンジ　町田久成君ノ話

尋常ヲレンジ　ハ　薩摩産キニクチンボ　ニ近シ

ブルードヲレンジ　ハ　内部瓤血赤色ナリ但シ味ハ同シ

マンダリンヲレンジ　ハ　支那種ノ蜜柑

タンジェリンヲレンジ　ハ　蜜柑ニ似タル形ニシテ内部ノ鬚味ナルコト等亦似タリ然レ圧其味ハ最美ニシテ蜜柑ニ優ル

十三年十二月十一日　田中芳男記

博物局

東京大学総合図書館

大十　邦産ヲランヂ之説　Sweet Orange. Citrus Aurantium

ヲランヂハ欧米共ニ通常食膳ニ供スル果ナリ故ニ其名ハ普通ノ教育書ニ載セ又之ヲ以テ地球ノ形容ニ或ハ金黄ナル色ノ名ニ用ヒ又書ハ西洋書ヲ読ム人ニ於テハ熟知スル所ナリ其形ハ圜圓ニシテ金黄色ニ於テモ我臭橙ニ似タリ故ニ従来譯シテ橙トス然レハ橙ハ酸味甚シク衛ノ四五月ニ至テ甘味ヲ生スレハ　ヲランヂハ初ヨリ甘酸ニ美味ナレハ橙トハ原ヨリ異ナリ却テ密柑ニ近シ而シテ其瓤皮共ニ密柑ニ似ズ別ニ一種ノ果ナルヘシ　ヲランヂニ数種アリ外皮ノ色ニ濃淡アリ又瓤ノ血赤色ナルアリ　マルタ島ノ産ナリ　ヲランヂハ英佛獨共ニ同名ナレハ茲ニ略スハ前ハ　スウヰト　ヲランヂ　ナリ英華字典之ヲ甜橙ト譯ス福州邊ノ人民モ清国人ハ甜橙ト称スト話ス然ルニ甜橙ハ名ヲ

鹿児島ニ於テハ此木ヲ往来冬家ニ植テ又ヲ益テ且培養シテ其実ヲ作ル
尤モ伝フ所ハ大木ハナキ由 樹ハ暖ハ大木トナリ得シ
シ該地ニ産スル蜜柑ヲ云フ所ニ其実ヲ味フノ
業ニ培養セバ大木トナリ其実ヲ
結フニ至ラン 果ヲ採リテ味フベシ
又ハ大果ヲ待ツベシ

稱スル所ノ蜜柑ト云ヘルハ近年欧米ノ果木渉リノ本邦ニ於テ始テ吠
ヲランヂノ苗モ亦傳ハリ盛ニ為ス所ノ洋果ニモ云ヘル蕃ニ薩
摩ニ年ニクネボト稱スル所ノ者ニ洋ヲランヂト同物ナルニ知レルカ
今又町田實則氏ヲ騰シ更ニ撿スル所ノ説ニ原其何
歴ヲ該地傳ヘ何ノ時ヨリアリシヤハ詳カナラヌナレド近年ノ者ニ
アラザルベシ 然レ其形状色味共ニ甜橙ニ異ナル唯較小ナルノミ
径ハ寸餘量三十六戈餘 又十二年三月大清國副公使張
斯桂君ヨリ伊藤圭介翁ニ贈リシ廣東柑子ハ亦此
キンクネボト形色味共ニ同シクシテ張君曰ク是ハ柑子ニシテ
橙子ニハ非ズ 三國志ニ在ル所謂欧柑之ナリト 是亦径一寸
許ナルハ異ナル所ヲランヂヨリ亦小ナルノミ 本ノ論ヲ以テ考フルニハ
ヲランヂハ甜橙ニシテ キンクネボハ本邦産ヲランヂニシテ 廣東

又近頃舶来ナル
廣東蜜柑ト云フアリ
下等ニ失ナル欧柑
ナリト聞ク

小笠原島ノヲランヂ
ト稱ニ近頃本ハ所
此多シトイヘドモ甚タ近
キモノナリ

柑子即欧柑ハ清國産ノヲランヂナリ 欧柑ノ字ハ三國
志ニ出ヘ云々ゼヨ 欧洲柑ノ略字ト看做スモ亦可ナラン
薩摩ニテタウミカント稱スルハ純黄色ニシテ形
正圓ナラズ上部隆起スル故ニ圓帯ノタウミカンニ非ズ形
色ナルトミカンニ似タリ 而シテ其味ハ全クヲランヂナレバ箕
赤ヲランヂノ種類中ノ者ナリ 高サ一寸三分 径二寸五分 量五十六匁

明治十五年一月廿日庭　田中芳男誌

一月十七日小澤善平ガ手

餘論
柑類ハ夥多ナル其中朝鮮人持来ル紀州ノ多有蓋ニ柑ニ屬
ナリ多産ハ暖國故紀州薩摩最多シ又明和年中ニ長崎ヘ
紅毛人持来ル一種美大ノヲランダミカント云フ
但此説本草講義十三ノ條ニ見ユ

タウク子ンボ

右ハ長門ノ山口城下ニテ結果スル所ナルトテ此頃品川内務サ
輔ヨリ贈ラル此品諸地ニ二本アリト又ダイダイハ大サ八九
寸程ノ樹モアリ蜜柑モアリ且ナツダイダイモアリテ土地ノ
北受ニ似合ハヌナリ然ルニ三田尻ノ地ハ南受ナレ𪜈相類ハ
ナシトゾ

タウク子ンボノ義ハ即シヤガタラミカンノ事ナレ𪜈今此
品ヲ見ルニ外面ノ様子ハザボンノ如シザボンハ蒂ノ
方隆起スレ𪜈此品ハ然ラズ然レ𪜈ジヤガタラミカントハ
大ニ異ナリ

右葉ヲ添ヘ指出候間葉ハ腊葉トナシ果ハ図ニシテ後
切断シ其図ヲ添ヘテ御廻附ナリタシ尤モ御當ニアリテ
ヨシ又其図ハ拝見ノ上返上スベシ寸法并量目ハ図ヘ書
入テヨシ

明治十四年二月五日

田中芳男

明治廿二年十一月写

コドンク子ンボ

薩摩國川邉郡古殿(コドン)村ニ奇果ヲ産ス、其品タル香欒ニ似テ香欒ニ非ラス、枸櫞ニ似テ枸櫞ニ非ラザルモノナリ、鹿児島ノ俗呼テ「コドンク子ンボ」ト云形チ畧ボ邏(トコ)柚ニ類シ大サ文旦ノ如シ、外膚粗ニメ疣瘔多ク其礧砢タルヿ或ハ癩漢面ノ如ク或ハ蟾蜍背ノ如ク、或ハ南瓜ノ如ク或ハ巖石ノ如ク危態千状殆ンド彷彿スベカラス熟シテ尚緑色日ヲ経テ漸々黄暈ヲ帯ブ内膜軽鬆ニメ厚サ寸餘皮ヲ連テ食フベシ淡甘ニメ一種ノ風味ヲ

東京高用
内務省

東京大学総合図書館

保ツ瓤ハ至テ小ク瓣韭白（ウスタマゴ）ニメ其質玲瓏味ヒ酸
甘稍文旦ニ似テ更ニ多汁ナリ核亦ク相類ス
前說ノ如ク吾鄉ニテハ僅ニ古殿村ニ産スル
ノミニメ未ダ鹿児島邊ノ市街ニテ販賣スル
ニ至ラス故ニ予其樹形葉狀ヲ詳ニスル能ハ
ス此果ハ外貌甚ダ恠異ナレ𪜈亦タ自ラ一種
ノ雅致有シ且ツ能ク保存ニ堪レバ盛ニ繁殖
セシナリ諸書ヲ撿閲スルニ適當ノ品少シ但
南海包譜ノ琉球ク子ンボ一名「ヲランダク子ンボ」
（充蜜檡者）ナルモノニ近似スルガ如シ然𪜈未
其是ナルヲ知ラス今参考ノ為メ茲ニ華夷花
木考ノ說ヲ抄出ス曰蜜檡色黄実似柰欒而形
尨匾皮厚半寸肌體細膩瓣甘如蜜故名連皮切
食之明治十二年二月十五日鹿児島ヨリ来ル
ノ一顆ヲ量ルニ百三拾四匁アリ

明治十二年二月廿二日

田代安定記

アマダイく

形チ畧ボ香橙若クハ雲州「ミカン」ニ類シ肌理細密ニシテ微皺アリ大サハ大抵朱柑ノ大ナルモノヽ如シ皮ハ香橙ニ似テ稍薄ク味淡甘ニシテ食フベシ肉膜黄白色風味微ナリ瓣蜜接シ隔膜至テ軟薄ニシテ皮ヲ離レ難シ瓤ハ粘柔ニシテ砕ケ易ク多汁ニシテ味ヒ蜜ノ如ク以テ上等ノ果トナスベシ而シテ核ナキコト猶雲州「ミカン」等ノ如シ此品甘ダイくノ名アリト雖トモ元ト回青橙ノ属ニアラス按ニ香橙ト雲州「ミカン」トノ中間ニ坐スルモノ

草稿用紙 内務省

ナラン
明治十二年二月廿二日東京神田一町ニテ紀州産ノモノ一顆ヲ得テ検査スルニ重廿一匁五分横径二寸余皮ノ厚サ一分強高サ一寸五分弱其價三銭ナリ前説ノ如ク皮理密ナレバ久ク保存ノ用ニ堪ユベシ
南海包譜曰甘代々形色共唐代々ト同シ味ヒ回青橙ノ如ニメ甘美ナリ

明治十二年三月十五日

田代安定記

ナツダイダイ　又ナツクネンボ

丹後宮津人　河瀬一所録

凡三四十年前長崎ヨリ傳来セリト云傳フ其事ヲ詳ニセズ里俗ナツダイヽ又ナツクネボト云長州萩ニ在ルノミ他ニテハ聞カズト云前ノ年四月頃実ヲ結ヒ翌ノ年七八月頃没落ストイヘリ
此実ハ別ノ年ノ結実セシモノナリ
幹ノ大サ当州ニアルモノ凡二尺四五寸ノ大ナルモノトス此實盛大ニ至レハ実多熟ルヘカラズト云ヘリ

些少ノ流行ニ苗木モ二百本位ハ用ユ意
アルヨシ
壱本ニハころ粒位ノ実ヲ結フヨシ
味蜜柑ニ似テ酸味アリ微苦ヲ帯ブ果皮柚皮ニ異
ナラス

明治八年三月十五日

伊豆ノ臭橙

片山直人曰 伊豆天城山麓大鍋村ニ橙樹多ク
作ル然レトモ実ヲ採リ製スルコトナク又東京ヘモ出スコトモ
一月ニ至リ枝ニ付キ在ル儘黄色トナリテ居ルハ後ニハ
回青スルトテ云フ 價ハ一銭ニ十五個位ナリ 又汁
ヲ搾リ入ヌ皮ハ皆棄ツナリ 惜シキコトニ
熱海近村边テ多ク作リ在ルヲ見ル 緑色ノ内ニ
切リ佛手柑ノ様ニ用ヒ其残リ類ハ汁ヲ搾ルヲ
見タリ橙皮ノ如赤キモノトハ雲泥ノ違ナリ
十四年三月二十三日

田中芳男

博物局

ウチムラサキ　十九号ノ　文旦 又文旦 又碑文　香欒 雅楽 円欒
朱欒 臭橙 又 紅肉柚

一此品ハ鹿児島県有馬新八氏ヨリ果実品評会ヘ出品セシ者ニテ
其ノ出品目録ニ香欒（ウチムラサキ）有馬氏実生 円形ニシテ有リ紅肉ナリトアリ
明治十七年一月十日田中芳男氏ヨリ当局ヘ来リ
山田清慶氏写生ス

一之ヲ半ヨリ貳片ニ横截セシスレバ其観恰モ紅紫色
牡丹花ヲ見ルガ如シ実ニ美麗ニシテ紅色ノ濃ナル此
品中第壹等ニ位ス

一 高サ　四寸八分五厘 高サナリ　四寸五分五厘 径ナリ

一 量　三百八拾匁

一 横圍　壹尺七寸 中央ノ最大部

一 油點 大ナル者大約五寸 小ナル者大約三寸 方四分[illegible]
大約三寸四分至五寸
一 外皮 黄ニシテ處々ニ緑暈アリ
一 肌膚 光滑
一 上下ノ凹窪ハ大約一分五厘ノ深サニシテ其凹陥スル面ハ蒂
ノ附着之處ニシテ方ニ[illegible]
蒂ノ附キ處ニシテ方ニハ五六分乃至八九分ノ隔離セシ痕跡アリ
セリ
一 肉瓤ハ厚サ五分乃至七分ニシテ水紅色 外層ト内層ト[illegible]状ヲ分瓤セズ
一 瓤囊ノ形状ハ其數十八アリ薄ク各自
隔膜 瓤ノ囊 ト密接シ一見スレバ一種堅ノ如ク
ナレドモ徐々ニ分離セバ各囊[illegible]ニ剥スベシ
此膜ノ色濃キコト全菓中第一ニシテ[illegible] 沙瓤ハ之ヨリ淺
ク肉瓤ハ淡キコト又一層ナリ 因テ之ヲ此膜ノ色ト沙
瓤ハ準ス 沙瓤アリ又瓤(肉)ノ浸染セシモノハ如シ
沙瓤ハ長サ四五分ニテ[illegible]ノ状ハ小嚢ノ集合スル者ニシ
テ瓤嚢表ニ包 セラレ 紅色ヲ含ミ此一小嚢中
ニ充ツル液汁ハ其紅色ヲ帯ブ [illegible]影多
ク小嚢表面ニ緊互聯スルヨリ遂ニ紅色ノ美觀ヲ
呈露スルナリ
一 横割面ノ径 四寸三分五厘
一 全菓ノ中心径寸程ハ空隙ニシテ瓤嚢ノ集リ處ニ[illegible]
菓ノ如キ白膜アリ
一 味 酸ニシテ微甘微苦
一 皮 辛苦

明治十七年一月

藤澤[illegible]命記

大分縣下 枸櫞砂糖漬

大分縣下ハ枸櫞澤山アリ 去ル十年博覧會出品ニシテ人ニ賞贊セラレシヨリ 爾来ト心得苗木許多持来リシガ 買手ニ大人ナキヨリ大ニ失望シ 甚苗ハ三田井等ニ植傳ヘ殖ケタリト聞ク 又該縣下ハ此果ヲ味噌漬 糠漬トシテ食スル由 因テ近年砂糖漬トシテ同名龜業傳菊村徳ガ持来ルモノナリトシテ池田儀兵衛ノ分販セリ 下佛世間普通ノ佛手柑漬ニ比スレハ品位下等ニシテ香気モ大ニ遜シ 因テハ支那糖蔵製ノ如ク柔ナル供ヲ貯ヘルトテ尚長崎

博物局

東京大学総合図書館

橙ノ蜜漬ノ如クセバ却テ可ナラントノ説アリ
厚生并ニ仏手柑漬ト称スルハ其初ハ枸櫞ヲ以テ製スヘキモ今
ハ嫩ナル臭橙ヲ用ヒルコトトハナレリ
又通日枸櫞ヲ賞ミシ如ク蘸菓ノ如キ味エヘ漬物トシテ
食膳ニ供スル人ハ尤モ見ルベカラ数ヘリ
東京ニテハ結果ヲ得ヘキモノ土ハ暖地ニテハ多ク果ヲ結ブモ南地ノ
ことナルベシ

明治十四年一月九日　田中芳男記

檸檬（レモン）ト枸櫞（マルブシュカン）ノ比較

檸檬ハ（西洋諸國ニテハ其酸汁ヲ用ヘタル）西洋諸國ニ於テ常ニ食饌上ノ要品タルノミナラズ
又皮ヨリ油ヲ製シ又酸汁ヲ製シテ薬用ニ供スルノ用アリ然ルニ
其原産ハ暖地ノ産ナルヲ以テ欧州南地ニアルノ外ハ皆
亜弗利加州（亜非）ヨリ輸入セリ印度地ニ於テモ（欧羅巴）之ヲ用ヰル欧州
ニ於ケルカ如シ然レドモ支那地方ニ於テハ太古ナキニヨリ圓形ノ
者ヲ圓（ウテ）ト檸檬ニ代エ此圓形ノ者ハ酸汁アレハ同様
ナレドモ菓ハ大ニ異ナルヲ以テ我黎檬子（スダチ）ニ甚似タメリ
従来檸檬（レモン）ノ形我枸櫞（マルブシュカン）ニ似タルヲ以テ同物トスレドモ
檸檬ハ瓤多クシテ酸液豊饒其味佳美ナリ皮ハ薄

シト称スル香油アリ然ルニ枸櫞ハ臭アリト雖モ甚タ少クシテ以テ酸汁ヲ出スニ足ラズ又臭ノ全クナキアリ故ニ従来以テ佛手柑廣トスル了人ノ知ル所ナリ又別ニ佛手柑（テブシュカン）ト云ヒ其形手指ニ似タルモノニシテ是ガ枸櫞ノ変化ニ係ル者ヲ以テ論スルトキハ檸檬ト枸櫞トハ別物ナリ

明治十一年六月廿九日

田中芳男

檸檬油ノ製煉法

レモン油ヲ製セントナレバ半熟ノモノ數百個ヲ得テ水中（器物ニ納ル）ニ於テ至極薄ク皮ヲ剝ギ採リ其水共ニ釜ニ納レ上ニ蒸餾器ヲ安上シ諸部ヨリ蒸氣ノ漏レザルヤウニ深ク注意シ適宜ノ火度ヲ以テ餾スレバ油ト水ト相混シテ流滴ス其油ノ出サルヲ以テ度トセリ而メ其油水ヲ溜ムルノ器ハ水中ニ置カザレバ温氣ニ由テ稍油ヲ飛散ス且ツ

其油ト水トヲ分離スルニハ上ノガラス器ニ油水共ニ納レバ油ハ上ニ浮遊シ水ハ下ニ遊離ス従ツテ乙ノ所ニ指ヲ當テ壜中ニ流入スル時ハ指ヲ離ナシガラス器中油ノミニ成ル時ハ直チニ指ヲ以テ塞ギ浄壜中ニ乙ノ微孔ヨリ漏ラシ口ヲ固封スベシコレ即チ檸檬油ナリ○其水ハ香烈ナレバ香花ノ精油ト混シ香水ヲ製シテ可ナリ○之レヲ製スルニ武火ヲ以テスレバ油ヲ飛散ス心得アルベシ○「レモン」ハ今日採レバ今日皮ヲ剥キ蒸餾スレバ油分多シ日ヲ過レバ必ス油分多カラズ○採ルニハ半熟ヲ過リレバ油分又少シ

又ノ法（甲斐織衛氏ノ説）

レモンノ半熟ノモヲ薑擦（シヤウガヲロシ）ヲ以テ皮而已ヲ多分ニ卸シ採リ壓搾器ヲ以テスレバ油分多ク搾出スト此方法未ダ試ミズ

レモン醋ヲ製ス法

油ヲ製スル𬼀剝ギタル「レモン」ヲ上下ノ板ニ狹ミ壓シテ核ト醋ト共ニ器中ニ取リ而シテ布ヲ以テ濾シ罎ニ納レ烈火ヲ以テスレバ稍黄ミヲ帯ヒタル泡ヲ浮ム之ヲ木𬼀ヤウノモノカ或ハ匙ヲ以テ相去リ泡ナキニ至テ止ミ磁器ニ納レ冷セバ又汚物器底ニ沈ム而メ醋ト汚物ト混シヤウニ罎ニ漏斗ヲ装置シ其醋ヲ分チ取リ口ヲ固封シ冷所ニ置ケバ又罎底ニ稍汚物ヲ沈ス然サレバ外ノ浄罎ニウツシ取リ罎口ヲ堅ク固封シ暗処ニ置ク日光ヲ注射スルヲ宜カラズトス而メ之ヲ用ユルニ當ツテ開封ス（此醋ハ口ヲ能ク固封セザレバ腐敗早シ）

此醋ヲ白糖ニ和スル法

白糖五十目ナレバ「レモン」醋五分或ハ六七分ヲ混和シブレッキ罐ニ納レ日数三十日許口ヲ封ジ其后チ夏分適宜ニ此白糖ヲ清水中ニ投入シ能ク攪擾シ「レモン」油三四滴ヲ加ヘ飲用スレバ暑

氣ヲ散ズ○方今市中ニ販クモノハ亜國ヨリ舶齎スト云フ亜丁ヨリ錫蘭邊ニテ多分ニ販クヲ見及ヒタリ

右田原陶猗氏ノ説織田寛之ヨリ来ル字

明治十一年六月七日

ロキノス

肥前佐賀ノ近傍二里以内ノ地ニ限リ栽培スレドモ其地ヨリ隔ツ尺ハ更ニ生活セズト云ヒ日本一品ノ奇種ナリト該地ニテ稱賛セリ其樹ノ高サ漸六七尺ナリ果ハ黄熟セザル頃ヨリ採リテ酸汁ヲ搾リ焼魚ニ注キ食ス酸味強クシテ甘美尋常米酢ノ比ニ非ルナリ

右ハ佐賀ヨリ来着セリトテ細谷祐義及石田為武ヨリモ該菓ヲ寄贈セラル之ヲ檢スルニ殆ト正圓ニシテ末僅ニ扁平ナルヲ覺ユ外面滑澤深

黄色ニシテ大サ径リ一寸四分高サ一寸貳分餘
アリ目方小ナルハ八銭位ヨリ大ハ拾壱銭七ト
アリ通例拾銭前後トスベシ
佐賀ニテ他ニ生活セザルノ説ハ未タ他ヘ移植
ヲ試ミザルモノナランカ此類ノ事ハ各地ニ往
々アルヿナリ
按ニ清國海航行ノ節佛國船ニテシトロント稱
シ出セシモノハ形ニ大小アレ𪜈大抵相同シ是
ハ清國産ナリ
又阿列産スダチハ此菓ト殆ト同一ナレ𪜈外面
稍凹凸アリテ滑ナラズ色モ亦赤色ヲ負ブ又南
海包譜ニ出ル圖ハ凹凸殊ニ多シ故ニ此菓ト同
一ニハ非ス稍変化スルモノナラン故ニスダチ
ノ名ヲバ用ヒズシテキノスト稱シテ置べシ

明治十一年十月十日　田中芳男記

木ノ酢　肥前國産

十六年十月品評會出品解

一通常會員　松井丞太郎

（名稱）未タ來名ヲ稱カス、方言之ヲ木ノ酢ト云フ

（種類）未タ確定スルヲ得スト雖モ、蓋シ蜜柑類ナルヘシ
　其樹葉等皆柑ニ同シ

（季節）五月頃花ヲ開キ漸ク結果シテ七八月頃ヨリ
　用ニ供シ九十月頃ハ稍ヤ熟シテ十二月頃降霜後
　黄色ヲ帯フルニ至テ熟ス、其以前ハ青色ナリ

（香味）其味極メテ酸ニシテ其香亦淹シ、未熟ノ時最モ
　甚シク成熟ノ後ハ稍々甘キモ決シテ酸味ハ失セス
　天然ノ酸ヲ有セリ依テ此名アリ

産地　肥前持産ニシテ該地根ニ此樹アリ然レトモ之ヲ他
　ノ地方ニ移植スル時ハ此固有ノ酸味ヲ失フテ通常ノ

蜜柑ハ異ナラズトモフ其蓋シ李侯風土ノ方向ニ由ルナラし
効用焼肴ニ添リ食品加味ハ殊ニ香魚ヲ焼クニ之ヲ絞リ
液ヲ汁ニ其味極メテ美ナリ…

和歌山勧業課江南郡風団照同ギヨリ申ニ付
此朱欒ハ京人谷崎嘱託ノ所ノ朱欒 羅書セシ
ノ書ニ見ユル名称 …

他人ヨリ送リ来リヲ受ケシコトアリタレ氏其
樹性ハ親シク目撃セス名称「さんす」
ト申シタリ然レ氏「さんす」即チ朱
欒 南海包譜ハ四形ノモノニシテ此ノ
「さんす」ハ其形ピヰリフォルム ニシテ

和歌山勧業課江前報国内置同書ヲ内牛
此書既定人写等撰之人所未楽[illegible]
[illegible]
之書之発名[illegible]

丁内資料 東京大学総合図書館

蜜柑ハ異ナラスト云フ蓋シ李侍[illegible]士ノ文甸ナル由ニナラシ
効用 焼肴料ニ食品加味ニ供シ青皮ヲ焼キテ之ヲ絞リ
灌グ件ニ其味極メテ美ナリ頗ル地方ノ[illegible]之ヲ知ルナシ

此果ハ曽テ小生紀及和歌山ニ至リシ時
他人ヨリ送リテ受ケシコトアリタレドモ其ハ
樹性ハ親シク目撃セズ名称「さんす」
ト申シタリ然レドモ「さんす」即チ朱
欒ハ南海包譜ニヨレハ稍円形ノモノニシテ此ノ
「さんす」ハ其形ハ「ピヰリフヲルム」ニシテ

牟纂トハ名異物ナリトス蓋シ和
歌山地方ニ於テ「さんよ」ト云ハ名異物
ハ野多アリ故ニ眞正ノ漢名ヲ知
ル能ハス尚ホ御勘考アリタシ

福羽逸人

クハクハツガユ

カサミカン

山ミカン又アマダチグミ 薩摩

葨芝

柘一種 田代孚之

洋名 *Maclura gerontogaea, S. et Z.*

第廿一綱四目 桑科

雲谷雜記曰蜀中有一種木彼人呼爲葨芝
其樹常ニ高サ丈餘、不甚増長、花小而白、毎
一歳開花、次年方結■子又次年方熟、蓋

草稿用
内務省
東京大学総合図書館

和名ガ柚ハ土佐柏島ニ産ス又此品ノコトハ品物考證上十三ニ詳ナリ　宮本令記

Cudrania javanensis Trec.

歴三歳、子如楮実、有文如亀背、味甘酸可食、今青城山、范仙觀卯坳蒲江縣崇真觀皆有之、故俗傳以為仙果

葛芝ヲ「クハクハツガユ」ニ充ルハ桐谷純水先生ノ説ナリ余モ亦タコレニ従フ、此樹隅州佐多邑、垂水邸、櫻島、薩州海門岳、山川邑、烏帽子岳麓、鹿児島近郊等ニ生ス、殊ニ沿海ノ地ニ多シ、落葉灌木ニシテ枝條長ク延ビ藤本状ヲ為ス、幹皮灰白色ニシテ雞距様ノ刺針多キ、葉ハ互生シ、形チカンニ

纖維強靭ナリ

ノモ若クハ櫧類ノ葉ニ似テ短闊、略ト〻ハ辺縁ニ缺刻アリ、質厚クシテ筋脈鮮明ナリ、夏月枝間ニ粟粒状ノ淡黄花ヲ開キ、後チ可ナヂイチ「ゴヽ」ニ似タル実ヲ結ブ、外面亀甲紋アリテ累々茘枝又ハ鳳梨ニ類似セリ、熟スレバ黄赤色ナリ味ヒ酸甘食フベシ、故ニ「アマダレグヽ」ニ甘茶莄ヲ（甘茶ハ児童ノ唱ニ云フ）ノ名アリ、大ナルハ顆径寸餘ニ至ル、ト云フ、[redacted]余ハ未ダ花ヲ審按セザレバ記スルニ由ナシ、姑ク他日ヲ期ス

草稿用

内務省

和法ガ柚ハ土佐柏島ニ産ス 又此品ノ如ハ品物考證上十三ニ詳ナリ 寄余記

学名[illegible]二記エ[illegible]

Citrus [illegible]

[illegible]ナレテ[illegible]ノ[illegible]アリ[illegible]ノ形ヲ大[illegible]

歴三歳、子如楮実、有文如亀背、味甘酸可食、今青城山、范仙観印刊蒲江縣崇真観皆有之、故俗傳以テ為仙果

裹芝ラ「タメクハツガニ」ニ充ツバ桐谷純水先生ノ説ナリ余モ亦タコレニ従フ、此樹隅州佐多邑、無水卿、櫻島、薩州海門岳、山川邑、烏帽岳麓、鹿児島近郊等ニ生ス、殊ニ沿海ノ地ニ多シ、落葉灌木ニシテ枝

余[illegible]一巻ニ犬ノ名ハ、[illegible]

黄ナリ余ハ食フベシ 明治廿九年二月 寄年記

ノ毛苦クハ擂類ノ葉ニ似テ短闊、時トシテハ辺縁ニ鉄刻アリ、質厚クシテ筋脈鮮明ナリ、夏月枝間ニ粟粒状ノ淡黄花ヲ開キ、後チ「ヤナギイチゴ」ニ似タル実ヲ結ブ、外面亀甲紋アツテ累々茘枝又ハ風梨ニ類似セリ、熟スレバ黄赤色トナリ味ヒ酸甘食フベシ、故ニ「アマメレグ」ニ（甘茱萸ニシテ児童ノ唱フル所ナリ）ノ名アリ、大ナルハ鶏径寸餘ニ至ル[redacted]トテフ、[redacted]余ハ未ダ花ヲ審按セザレバ記スルニ由ナシ、姑ク他日ヲ期ス

草癖用

内務省

東京大学総合図書館

一ムベ之説 十五年三月二十九日園ニ而ツ托ス 田中芳男

野木瓜ハ園内ニ植ヘテ其葉ノ四季ニ美緑ナルト実ヲ結バセ賞翫スル等ニヨリ常ニ花戸ノ取扱フモノトハナレリ原来味品ハ通草ノ属ニシテ常緑且大ナルモノナルヨリ又トキハアケビノ名アリ産地ハ東国ニナシ伊勢紀伊等ニアリ然レトモ多数ニハアラス大隅鹿児島縣ヨリ出京セル柳六十三歳ノ話ニ曰桜島ニ自生甚多シ番薯ノミ食スル人ノ食餌ノ助トナルノ外籠ニ入レ鹿児島ヘ出シ売ルニ価甚廉ニシテ一籠ノ実代金弐銭五厘位ナル故ワザワザノ利ヲ得ズ又嗜ム人モ少シ然ルニ内氏ハ製煉事ニ心掛ケルニヨリ肉ヲ煎熬シテ甜味ノ漿液ヲ製シ又果皮ヲ醗シテ火酒ヲ製シ又種子ヲ搾リテ油ヲ得シガ皆凝結シテ蝋トナル因ニ

農商務省

明治十二年十二月下 田代安定識

東京大学総合図書館

皿ニ盛シ点火スレハ明光ヲ放ツ蠟燭ニ製シ試ムニ先ハ佳ナレモ熔ケ易シ種子一斗ニハ升ヲ得ヘ蠟量三斤以内ナリ搾リ石鹸ニ用ヒハ或ハ佳ナランカ試ミタシ

又同人ハ霧島山ニ黄実ノ苺多シ誰モ採リ用フル人ナシ何カニ製シタシ又大島鬼界島ノ烟草長葉ナレモ質宜シ以テ改良ヲ加ヘ巻烟草ニ用フヘシ又鹿児島縣下ニ秋烟草夏烟草ノ别アリ夏トハ土用ニ収ムル普通品ハ秋烟草ナリト云ニ

會員稲波惇太郎氏ヨリ郁子ニ滋養分ノ有無ヲ質問セラル余ハ寡聞淺學ニシ其應答ニ由シナシト雖氏曾テ記憶スル所ヲ以テ左ニ筆記ス

此種ハ支那及ヒ我カ日本ニ産スルノ外西洋各國ニ産スルモノアルヲ聞カズ其支那ニ産スルヲ *Stauntonia chinensis* ト云ヒ日本ニ産スルヲ *S. hexaphylla* ト云フ此果熟シテ味ヒ甘美食スルニ堪ヘタリ然レ氏其滋養分ノ如何ニ就テ明辨セル説アルヲ見ス本邦古来俗間ノ語ニ據レハ果ヲ食シテ長壽延年ノ効アリト抑何ノ故アルヲ知ラズ又洋籍ヲ閲スルニ日本人ハ此果ヲ食シ又汁液ヲ採リテ眼睛ニ點シ眼病ヲ醫スルノ藥トナストト云々此洋説ハ日本人

ノ傳話ヲ記載セルモノニシテ其効用ノ果シテ然ルニ
アラズ思フニ此果ノ効用ハ他ノ果物ヲ食スルト同
一ニシテ著シキ滋養分ノアルヲ証セズ其滋養分ノ精
説ヲ了解セント欲セハ分析家ニ就テ質問セラレン
コヲ乞フ
附言ウベ又ムベ一名トキハアケビ古名郁子延喜式
漢名野木瓜又藺子ト云フ林氏綱目第二十二綱第
六目自然科目通草科ニ属ス常緑葉ノ藤蔓植物ニ
シテ諸國ニ自生アリ特ニ近江大和伊勢朝熊山紀伊
熊野等ノ山中ニ産スルモノ最モ有名ニシテ人ノ能
ク知ル所ナリ茲ニ此一言ヲ贅シ以テ参考ノ一ニ
供セントスト云フ

菓物類

一 夏グミ　丈六尺　代金弐拾四銭
一 亀グルミ　丈六尺　代金拾八銭
一 楊梅　丈六尺　代金弐円拾銭
一 蛮熊柿　丈四尺　代金三拾銭
一 少白服丸　丈七尺　代金壱円拾銭
一 甲州丸　丈四尺　代金二拾弐銭五厘
一 白イチヂク　丈四尺　代金壱円六銭

一 芋執る　本五人　代金七拾五銭

唐枇杷　〃　壱本　代金弐円也

一 枇杷　〃　壱本　代金八拾五銭

一 ヒノグルミ　本壱本余　代金五拾銭

一 イチイガシ　本壱人寺　代金

一 瓦巻カヤ　本四人　代金九拾銭

〆 拾三本也　九〆口　壱本　六五銭

八年九月廿八日

男保源四郎

菓物類上直段書

一 麦グミ　壱本　本二人　代金弐拾五銭

一 兎グルミ　〃　〃　代金弐拾八銭

一 楊梅　〃　〃　代金弐円ト拾銭

一 豆柿　〃　本七人　代金三拾銭

一 河守殿丸　〃　廿七人
代金壱両ト弐拾疋

一 甲刕丸　〃　廿四人
代金弐拾疋

一 白イチゴリ　〃　〃
代金壱両ト弐拾疋

一 草槙子　〃　廿五人
代金八拾五疋

一 唐枇杷　〃　〃壱丈
代金弐両也

一 枇杷　〃　〃
代金八拾五疋

一 ヒノグルミ　〃　〃壱丈余
代金五拾五疋

一 イチイガシ　〃　〃壱丈五寸
代金二拾弐疋五厘

一 唐巻カヤ　〃　〃廿四人
代金九拾疋

一九ノ口

一丈七尺

代金三拾五銭

[illegible]

[illegible]

記

一 胡桃一種チヤウジクルミ

羽州野代ニ形円大ニシテ殻薄ク手ニテ砕キ

仁ヲ出スベキモノアリ

一 胡桃

會津近在多ク産ス形チ至テ小サク榛実

ノ如ク玩弄ニ堪タリ方言姫グルミト云フ

今ハ甚タ少シト云フ

一 サハグリ

此ハサハグルミト別物ニシテ建築又ハ器

物ヲ製スルニ用ル材ハ樹ノ三十ヨリ
東京ニモ多クアリ花葉ヲ採
ニセ故ニ花ハ若キニ摘ミテ
葉ハ又材ト倶ニ採ル
ヨシ
洲外胡椒類ノ今般
ヤニ
當
十分

薑菜糖藏法

嘉永四年ノ頃駿河ニ在テ病後ノ無聊ヲ慰スル為メニ静岡藩ノ糖菓匠ヲ招キテ各種ノ糖藏シナシ畧其方法ヲ知レリ今茲ニ其大概ヲ記ス

天門冬

霜降後茎葉ノ枯ルヽヲ見テ堀揚テ前年生スル所ノ暗褐色ヲ帯タル根ノミヲ撰出シ今年ノ新根ト一昨年ノ舊根トヲ交ヘス之ヲ洗浄シテ蒸シ其粗皮ノ皺スルヲ度トシ出シテ皮ヲ去リ根ヲ竪ニ割リ中心ヲ貫ク所ノ白色ノ筋ヲ去リ沸湯中ニ投シ静ニ攪廻スル[コト]三十度

（此節ヲ去ラザレバ苦味ヲ脱シガタシ）

ヲ以テ適宜トシ出シテ藁灰中ニ混和シ一夜ヲ経テ
取出シ後水一升ニ蕎麦粉五勺ヲ和シタル中
ニ浸シ置キ一日ニ三度ヅヽ攪廻シ三日ノ後ニ出シテ
浄水ニ洗ヒテ後水分ヲ去ル之ヲ青銅鍋（カラカネナベ）又陶鍋（ヤキモノナベ）
（鉄鍋ハ鉄鏽ニ侵染スルノ患アルヲ以テ用ユベカラズ）ニ入
レ白糖（下品ノ白糖即チ黄糖ヲ用ユ但シ上等ニ製ス
ルニハ極上ノ白糖ヲ用ユ）ト共ニ煮ルトキハ泡沫ヲ生ス其
泡初メ小泡ヨリ漸次大泡ニ至ルナリ其煮熟ノ度ハ
拇指ト食指トノ間ニ着ケ之ヲ分ツニ甚粘着
セル分許ヲ引延バスベキヲ度トス之ヲ煮熟ノ結果

トス並ニ於テ上等ノ白糖ヲ鍋内ニ入レ合シテ後火ヨリ
下ストキハ天門冬ハ潰爛シテ飲ニ本形ヲ失ヒ粘塊
トナルナリ其熟スル中ニ撮ミ取リ天門冬ノ本形
ヲ作リ白糖中ニ投ズレハ白糖忽チ周囲ニ粘着
シ白衣ヲ粉抹シタル天門冬トナル放冷シ貯フベシ
世ニ天門冬ノ砂糖漬ト称スル者是ナリ然レ圧多クハ製
造スルノ糖蓮匠ハ（菓糖ト）煮熟シタル儘ヲ壷中ニ貯ヘ置キ
買却セントスルニ臨ミ再ヒ温メテ形ヲ作リテ白糖ヲ
粉抹スルナリ是久シク（白糖ヲ持セ）貯蓄スレハ内部ノ黄糖滲出シ
テ白糖ヲ穢スノ患アレバナリ

佛手柑

世ニ佛手柑漬ト称スルハ皆橙ヲ用ユ原来佛手柑ハ九州地方ニ非レハ甚少ナリ且稀少ナルヲ以テ皆橙ヲ代用セリ橙ハ尚嫩ナル緑色ナル時ニ採リ其実ノ四方ヨリ薄ク切リ蘂ニ至テ止ム之ヲ湯中ニ投シ静ニ攪廻スルヿ二三千度ヲ適宜トシ出シテ水壱升中ニ石灰五合攪混シ明礬十匁ヲ入タル中ニ浸スヿ三日間ニシテ出シ浄水ニ洗ヒテ潔白ナルニ至リ於ニ入レ水分ヲ去ル此品ハ天門冬ノ如ク潰爛スルヿナシ之ヲ黄糖ニ煮テ後白糖ヲ拗抹スルヿ前条ニ同シ然レモ此

生薑

秋後堀揚ケ根塊ノ外皮ヲ削去リ薄ク切リ沸湯ニ投シ静ニ攪廻スルヿ五十度ヲ適宜トス取出シテ後黄糖ニ煮テ後白糖ヲ拗抹スルヿ前条ニ同シ但シ辛味強烈ノ品ハ糖蔵ニ用ヒカラス

右天門冬　佛手柑　生薑ノ三種ハ世上ニ販賣セル糖菓ノ普通品タリ尚左ノ三種ハ飲ニ糖蔵ヲ試ムヲ以テ次ニ挙ク

冬瓜

上等品ノ外皮ヲ去リテ肉皮ヲ長サ壱寸幅壱寸厚サ五

分許ニ切リ沸湯中ニ投シ静ニ攪廻スヘシ十度ヲ
適宜トシ出シテ黄糖ニ煮テ後白糖ヲ掺抹スヘシ
前三種ニ同シ但シ此品ハ天門冬ノ如ク潰爛ス
ルヲ以テ天門冬ニ於ルガ如クシテ真形ヲ作リ而シテ白糖ヲ抹スヘシ

蓮藕

外皮ノ損傷セザルニシテ潔白ナル者ヲ撰ミ薄ク切リ又ハ外
皮ヲ去リテ細長形ニ切ヘシ之ヲ沸湯ニ投シ静ニ攪
廻スヘシ十五度ヲ適宜トス黄糖ニ煮テ白糖ヲ掺抹
スヘシ前生薑ニ差ハ異ナラズ

牛蒡

上等ナル根ノ外皮ヲ去リ横截(ワギリ)シ沸湯ニ投シ
静ニ攪廻スヘシ十五度ヲ適宜トス黄糖ニ煮テ白糖
ヲ掺抹スヘシ前条ニ同シ
右ノ外尚ホ松蕈、竹筍、款冬花、蘘荷根、
玉蕈(数序叢生スル者)等各種ノ蔬菜ニ於テ
糖蔵スヘキ能ハザルナシト雖モ其糖蔵法ニ至リ
テハ更ニ異ナルコトナキヲ以テ今之ヲ略ス

明治十二年二月　長田帰郷記

柚びし　一個

右頂戴仕リ候もの　原来羊羹状ヲ製したる品備中天掛ニ名物たり　今ツ贈られ来とて其製異なれハ其法ハ大抵同しきものなり　並ニ当ヘ上方ニて業ヲ為す所ノ方法あり試みて為ヲ左ニ記しおく

柚醢製法

柚子ノ頭ヲ切リ内部ノ瓤ト内皮ヲ蛤介ニテ充分ニ去リ其空殻内ヘ　道明寺　白味噌　白砂糖　各六杯　醤油三杯ノ割ニ合セタル

着ヲ詰込ミ切取之蓋ヲ被ヒ而シテ蒸シ熟セシム右ハ
蒸シ立ノ中ニモ食スルモ又ハ放冷シテ後ニ切リ食ス柚
香アリテ美味ナリ
右方法恐クハ淡路洲本町ノ品ト同物ナラン
明治十四年八月四日
田中芳男
亀田清次扣

呈上
柚べし
備後国福山城下ニ當店ヨリ東西ニ送リシ
ニ古来ヨリ製セシ品ナリ其製法ハ新鮮ノ柚ヲ撰ミ
フタヲ取リ中ノ実ヲ取リ又フタヲナシ蒸シ果ヲフカニ盛テ
ホロヨリ切テ出セル品ハ何レニテモ新ラシキ分ハ
食セリト田舎ニテハ黒キ程ニ蒸シテ食セリト云リ
八月三日
広島縣ノ産物 福山 蒸物 福山
外ニ御承知ノ御事也

農商務省

東京大学総合図書館